

## 巻頭言

### 『社会系教科教育学論叢』刊行に寄せて

社会系教科教育学会 会長

關 浩 和

社会系教科教育学会は、平成元（1989）年11月に、星村平和先生を会長として、兵庫教育大学大学院の社会系教育コース修了生を母体に、約130名の会員数で設立された。本学会は、学校教育における児童・生徒の社会的資質形成を意図する授業実践の研究を基本的性格にしている。平成元（1989）年の学習指導要領改訂によって、小学校低学年の社会科が生活科に、高校社会科が地歴科・公民科に変わったのを契機に、これらの教科を内包する意味で、「社会系」という名称がつけられた経緯がある。また、学会名に「全国」や「日本」が付いていない理由について、第2代会長岩田一彦先生は、「日本に閉じこもっているのではなく、21世紀社会では、世界に開かれた学会として発展してほしいとの願いが込められている」と命名の由来を述べられている。平成が始まると同時に、社会系教科教育学会は発足し、平成11（1999）年には、日本学術会議登録学会として認められ、現在530名の会員数を有し、本学会は、名実ともに社会系教科教育学における第3の全国学会としての地位を確立している。本学会の目的は、社会系教科教育に関する教科理論、教科カリキュラム、授業構成、教材構成、教材開発、学習指導法、評価法などの理論と方法を研究し、その成果を発信する重要な役割を有している。本学会の主な事業は、年1回の研究発表大会の開催と機関誌『社会系教科教育学研究』の刊行、学校現場との連携プロジェクト研究（現在までにプロジェクトA～Hまで採択されている）を行っている。その他にも平成22（2010）年には、学会創立20周年記念として、学事出版より『社会系教科教育学研究のアプローチ～授業実践のフロムとフォー～』が刊行され、平成30（2018）年には、学会創立30周年記念として、風間書房より『社会系教科教育学研究のブレイクスルー～理論と実践の往還をめざして～』が刊行された。

第1回研究発表大会は、平成元（1989）年11月26日に、兵庫教育大学教育・言語・社会棟1F視聴覚教室と2つの講義室を会場として、兵庫教育大学大学院社会系教育コースの修了生を中心とした83名の参加者を得て、初代会長の星村平和先生と第2代会長の岩田一彦先生の記念講演と2つの分科会で、20本の自由研究発表が行われている。社会系教科教育学会の母体となった当時の社会系教育コースは、18名の教官（教授8名、助教授7名、講師1名、助手2名）で構成されており、現状と比較すると夢のような状況である。私が入学した昭和63（1988）年の教科教育分野は、星村平和先生、岩田一彦先生、中村哲先生の3名が、教育・言語・社会棟7F西側の研究室に並んで配置されており、院生からは、3名の先生を含めて、教育・言語・社会棟を「白い巨塔」と呼んでいた。学会が設立された平成元（1989）年に、星村先生は、国立教育政策研究所に異動され、星村ゼミに所属していた3名の院生は、M2生になる平成元年には、岩田ゼミに移られ、岩田ゼミは、M1生を含めて、13名の大所帯になっていた。当時の大学院社会系教育コースの院生定員は、30名で、約9割を現職派遣の教員が占めており、現職派遣教員は、全国各地の代表として派遣されてきた気概があり、他府県に住む院生は、単身寮や家族とともに世帯寮に住み、24時間大学キャンパス内で切磋琢磨できる環境にあった良き時代である。ソフトボール好きな岩田先生の影響で、社会系教育コースでは、ゼミ対抗のソフトボール大会があり、そのために、毎週月曜日の午後、ソフトボール場に院生が集まり練習をする。講義やゼミで参加できない院生もいて、人数が少ない時には、人数に見合った変則的な守備になり、時には三角ベースの試合になる。ソフトボールが終わると、大学会館の食堂でビールを飲みながら、語り合うことがルーティンになっていた。当然、大学会館の食堂だけでは物足らず、当時、大学近くには鉄板焼きの店（ヒゲさん）やカラオケ店（ジグザグや銀座）もあり、そこに

繰り返していき、さらに元気がある時には、旧社町内にあるお好み焼き屋（里）まで出かけて行く。飲み会の話題は、その日のソフトボールの話を皮切りに、最終的には、いつも「社会科教育」について語り合うことになる。毎日が「社会科漬け」になっていったのは間違いない。社会科教育に関する見識や自分の知識のなさ、県が違くと学校も授業も全く違うことなど、情報交換をする中で、自分の足りない部分を自覚することを繰り返していた。

兵庫教育大学は、当時文部省の新構想大学として、従来の国立大学の組織、管理運営体制とは異なる組織体制によって設置された国立大学である。新構想大学には、筑波大学のような総合大学や医科大学、技術科学大学、大学院大学などがあるが、新構想大学の新教育大学として、設置されたのが、兵庫教育大学（1978年設置）であり、上越教育大学（1978年設置）、鳴門教育大学（1981年設置）である。開学して10年程は、8月の入学試験の日や入学式に、正門付近で、教職員組合による大規模な反対運動や街宣車が繰り出され、騒然とした雰囲気があった。新構想大学が期待する教師像として打ち出した「教育者としての使命感と人間愛に支えられた専門職としての高度の資質・能力を備えた」教師を育成することが、教員組織に階層性を導入するものであると教職員組合や革新勢力から強力に反対されたことによるものである。私自身も愛媛県の現職派遣教員として大学院に入学した立場であり、教育委員会で派遣のための試験を受けた際に、「入学試験の際には、必ずタクシーで入構するように。正門付近で誰かに声をかけられても無視するように」と助言されるので、何のことだろうと思って、入学試験に臨んだことを思い出す。入学試験の朝、言われた通り、泊まっていた西脇のホテルからタクシーで行き、正門付近で、「受験生は、学校現場に帰れ！」と強烈なヤジを飛ばされ、「なるほど」と教育委員会での助言を理解することになる。院生になり、世帯寮の12号棟に住み、翌年の入試や入学式の際に、正門付近の騒がしい雰囲気を見学に行ったことが懐かしい。今では、入試の日も入学式の時もいつもと変わらぬ静かな雰囲気中で、昭和63年や平成元年当時の雰囲気はなくなり、時代の流れをある意味さみしく感じている。それは、大学にも微妙な変化をもたらしている。令和4年現在の社会系教育コース教員は、7名、院生の定員は半減の15名で、現職派遣の教員も毎年2～3名程度になっており、30年を経て、当時を知る者としては、決して活況を呈している状況ではない。しかし、兵庫教育大学は、令和4年3月に文部科学大臣から「教員養成フラッグシップ大学」の指定を受け、教職大学院のトップリーダーとして、確実に新たなステージに突入している。

Society5.0時代を生きる子どもたちの教育のあり方は、令和元（2019）年の新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、急展開を見せている。テレワークやオンライン授業、対面とオンラインのハイブリッド授業、ハイフレックスやオンデマンド型の授業などが定着してきた状況の中で、現在、学校現場では、一人一台端末やデジタル教科書にシンボライズされるGIGAスクール構想や個別最適化する学び（AL）など、学校現場においては喫緊の課題が顕著になっている。そこで、今、教育界に求められている新しい教育のあり方を具体的授業レベルで提言することや、これまでの理論と実践を往還しながら、学会としての研究成果を公表していくために、令和4年度から新たな事業として『社会系教科教育学研究』の別冊『社会系教科教育学論叢』を不定期で刊行することにする。特化するテーマは、学会創立30周年記念として刊行された『社会系教科教育学研究のプレイクスルー—理論と実践の往還をめざして—』において、社会系教科教育学研究における課題として示した①カリキュラム・マネジメント②資質・能力（コンピテンシー）育成③授業デザイン論（歴史研究、外国研究、授業研究、ESD研究等を含む）④評価研究⑤教師教育の5つの鍵概念に、GIGAスクール構想やエドテック活用を内包して、新たに次の4つの分野①カリキュラム・教科内容論、②授業構成論、③評価研究、④教師教育で再構成をする。

『社会系教科教育学論叢』は、次期学習指導要領改訂に向けて、教育界及び会員の方々に、新しい教育のあり方を提案できる場を提供することを目的としている。学会創立40周年に向けて、小さな一歩であるが、新たな歩みを進めていく。今後とも会員の皆様のご協力とご支援をお願いする次第である。